

	<p>エッセイ</p> <p>ある留学生の足跡</p> <p>SCE・Net 持田典秋</p>	<p>E-51</p> <p>発行日 2013.8.14</p>
---	---	--------------------------------------

### プロローグ

私達が最初に彼女に出会ったのは、2001年7月カザフスタンの当時の首都アルマティであった。カザフスタンは、長男が前年から仕事で赴任しており、私たちにとって二度目の訪問であった。たまたまその時は、長男は仕事で忙しく、案内役を彼の秘書の友人で日本語学科の学生である彼女に依頼したのであった。

その時は、まだ日本語はたどたどしかったが、一応の会話はでき、二日間のガイド役は無事終了した。ガイドブックに出ていた、彼女の知らないカザフスタンに抑留されていた日本人捕虜の墓地まで行って、墓参りをしたりもした。彼女は、日本語を勉強しているのでぜひ日本に留学したいと言っていた。

### 日本語研修生

それが事実となり、試験・面接を受けて合格した彼女は、国費留学で筑波大の日本語研修生として、その年の10月に日本にやってきた。滞在は一年間であったが、毎朝携帯電話のメールで「お父さん、お母さんお早うございます。」と言って来る気配りには感心した。わが家にも時々泊まり掛けで来て、食事をし、会話を楽しみ、一緒に日本料理を作った。鎌倉に行ったり、友人二人を連れて来て横浜市内観光をしたり、みなとみらいの花火を見たりしているうちに、一年間はあっという間に過ぎた。彼女と会っているときは楽しかったが、帰った後はまるで嵐の過ぎ去ったような感じがした。それは彼女が発散するエネルギーに圧倒されたからだと思う。何事にもずいぶん積極的であった。

日本語は上達し、敬語も使えるようになった。クラスでは成績優秀者に選ばれた。別れの時に彼女宛に私が書いた手紙が、彼女の一年間の様子を物語っている。

### クアちゃん

(この名前の名付け親として気に入っている名前です)

一年間の優秀な成績での留学修了、おめでとう。本当に良かったね。

私達昨年7月、始めて会ってからわずか一年少女なのに、なぜかずっと昔からの知り合いのような気がします。あの時はまだ留学も決まっていなかったけれど「日本に留学することができたら、日本のお父さん、お母さんになってあげるよ。」と言ったことが現実となり、もう完了形になってしまいました。それにしても、おそらく随分沢山のことを吸収し、また周囲にも多くの影響をもたらした一年、

その割にはものすごいスピードで過ぎ去った一年。今そのように感じているのではないのでしょうか。

たまたまカザフスタンに駐在していた長男の紹介で始まったこのお付き合いは、偶然の巡り合せが出发点です。人の出会いというのはそのようなものなのでしょう。だからこそ出会いというのは非常に大切なことです。

クアちゃんから、私たちも随分刺激を受けました。私たちから見たら、若干二十歳の女の子なのに、人脈をどんどん作っていく積極さと気配り、異文化を素直に受け入れる心のゆとり、外国語を身に着ける術などなどこれらのことは本当に驚きだし、心底素晴らしいことだと感じます。また、クアちゃんのことを外で時には話題にしますが、その中で東工大の助教授にクアちゃんが奨学金の中から本には惜しげもなくお金をつぎ込み、国に帰ったら買うことのできない本だから今買っておくのだということを話したら、彼も学者として、また留学生を大勢預かっている立場として、「貨幣価値の違う国から来た留学生としては、なかなかそうは出来ないものです。それは立派ですね。」とずいぶん驚き感心していました。私も感心したからこそ話したのですが、カザフスタンのお父さんからそう言われたみたいですから、クアちゃんの価値観が大いに認められているのです。

私達にとって、留学生の世話をするという事は初めての事だったので、最初戸惑いも感じましたが、クアちゃんという順応性のある人だったから、こうして無事一年間お世話できたと思っています。我が家を自分の家のように、来るときは「ただいま」、寮に戻るときは「行ってきます」という挨拶。同じカザフスタン生まれの愛猫のターニャとも仲良しになったし、本当に我が家の一員になり切っていました。

私達には、息子だけの子供の中に女の子が増えたようで、また特別な新鮮さをもたらしてくれました。ただ、私にはクアちゃんがいなくなる事がどんなことなのか、まだ実感が湧きません。今日、カザフスタンに帰るのは一時帰国のような気持ちで、そのうち日本に、いや我が家にまた舞い戻って来るのでしょうか。そうと思っています。クアちゃんのメンタリティは、日本人にぴったりです。カザフスタンにいても、これからも日本にかかわる仕事をずっと続けていけることを願っています。

目指す道に進むためには、今後とも健康に気をつけながら、今までのように何事にも好奇心を持って、より一層の勉学に励んでください。若さだけに何時までも頼らず、あまり無理なことをしないように。

カザフスタンのご両親に、お二人の健康とご家族の発展を願っていることをよろしくお伝えください。

さようなら ダスビダーニャ

クアちゃんの日本の父より

## 大学院博士課程前期

彼女は帰国後、大学を卒業した。しかも大学は一年間不在だったため通常二年掛かるところを、大学当局と掛け合ってレポートを出して一年で卒業出来たのには驚いた。成績とレポートの内容が評価されたのであろう。卒業後、大学に籍をおいて日本語教育の助手をしていたが、私の予感が当たって2004年再度国費で日本の大学院を目指して筑波大にやって来た。彼女は教育学を専攻するため、外から見ると元東京教育大だった筑波大は、打って付けだと思われた。

入学のための勉強が忙しく、以前ほどはわが家には来られなくなったが、メールや電話などで相変わらずコンタクトは取られていた。

大学院に進学でき、カザフスタンの教育事情について研究をしていた。帰国した際は、教育庁や地方の教育関係の組織を訪問し、かなり調査やインタビューをして歩いたようだ。

日本語も堪能となり、ロシアとの国際会議の通訳にも抜擢されるほどで、ロシア語は読めても話すのは不得意な研究者である教官にとって、彼女は海外出張にも同行させ、無くてはならない存在となっていた。

我が家にも時にはロシアとかボスニア・ヘルツェゴビナの友人を連れて現れ、着付けのできる妻の友人に頼んで着物を着せてもらい、記念に写真を撮って楽しんでいた。同時に茶道も習った。着物姿が堂に入っていて、まるで地方の大きな旅館の若女将然としていた。

## 結婚そして出産

カザフスタンに帰国した際、親戚の人から紹介された彼と相思相愛になり、結婚することとなった。カザフスタンでは、女性は二十三歳にもなると結婚して子供を持つのが当たり前の世界。それを過ぎていた彼女には、そろそろ結婚しなくてはという周りからのプレッシャーもあった。

出会いはちょうど日本のお見合いのように、レストランに双方を呼んで会わせという方法である。彼はカザフ人であるが、アメリカの企業で働くエンジニアで、海外を飛び回っていたが、彼女と同じ高校の先輩に当たっていた。2007年9月、アルマティで花嫁の親が催す「花嫁を送る会」だけが行われた。本来ならカザフスタンでは三日間ぐらい続く結婚式は、未だに行われていない。彼の勤めの関係で、ドイツで数ヶ月一緒に暮らした。

大学の教官からは、ドクターコースに進むには、子供は作らないほうが良いとアドバイスされていたが、早々に子供を授かった。彼女は育児と学問の両立は難しいから、大学をやめると言い出した。そこで、長男も交え家族中で彼女を説得し、今まで苦勞して頑張ってきたことはどうなるの、今大学をやめてはいけない、先生には本当のことを言って、今後どうするかをきちんと相談しなさい、と。特に妻が親身になって相談相手となった。

結局、教官からのアドバイスで一時休学し、カザフスタンに帰って出産した。

子供は女の子で名前はサユリとつけた。その後カザフの習慣で、実家ではなく舅・姑と一年間暮らした。

### 大学院博士課程後期

いよいよ最後のドクターコースを仕上げるため、今度は夫婦二人して来日した。彼も筑波大のエネルギー学科の修士に私費留学をするつもりだった。その願いも叶って、日本での二人の生活は始まった。その間子供は、舅・姑が預って育てていた。彼女は年に何度かカザフスタンに戻る。初めは子供は小さくてわからなかったが、段々物心がついてくると、別れの寂しさにサユリとママは二人共に大泣きをして別れ、彼女は日本に戻った。ママはどんなに離れていても、子供にとっては唯一のママだった。女としてこういう辛い悲しい経験もしている。

彼女はロシア語、カザフ語、英語が堪能な上、日本語も完璧だった。長男の結婚式に出席してスピーチをしたが、態度も堂々としており、出席者が皆その内容と日本語の巧みさに驚くほどだった。

何度も休学のため、国の奨学金は打ち切られていた。そのため、翻訳などのアルバイトで収入を得ていた。しかし、大学の掲示板で見つけた奨学金に応募したところ、彼女も選ばれ貰えるようになった。それは伊藤園の奨学金で、本来は科学系の留学生在が対象だったようだが、三十歳という年齢制限で彼が応募できなくて彼女が応募したところ、プレゼンとインタビューで一時間も話し、伊藤園の偉いインタビューアーと意気投合し、決ったらしい。「教育は愛です」の台詞がすっかり受けたようだった。唯一の文系の学生だった。

いよいよドクター論文への挑戦が始まった。筑波大の教育学ではドクターはしばらく出ていなかった。最初は、指導教官からは博士号を取るのは無理でしょうと言われていた。しかし、主任教授から内容が良さそうだから書いてみなさいと言われ、何回かの予備審査のため、専門用語を駆使しながら日本語で論文を書き続けた。テーマは「カザフスタンの言語教育政策に関する研究」というものだった。この方面には全くの素人である私も、論文に書かれた日本語の妥当性を確かめるため、頼まれて査読に協力した。カザフスタンでの調査やインタビューの結果が盛り込まれていた。毎週二度ほど、メールで送られてくる章毎の論文の査読は、私にはかなりのプレッシャーだった。しかし、私もこのお陰で、カザフスタンの教育についてかなり詳しくなった。最終的に出来上がった博士論文は、二百二十ページに及ぶもので、見事基礎教育学の博士となることが出来た。筑波大の教育学では、日本人も含めて十二年ぶりの博士の誕生だという。

2012年3月、彼もちょうど修士課程の論文が通り、めでたく二人して卒業することになった。卒業式には、私達もつくばに出かけて出席した。日本語の得意でない彼のために、まるで姉さん女房のようにまめまめしく世話を焼いていた。彼女は、成績優秀者としても表彰された。帰国前には、わが家で長男一家とカザフで親交のあったメンバーが集まって二人の壮行会を行った。

彼女には、ちょうど論文の完成したその時に、二人目の子供が出来た。

カザフスタンに帰った二人は、初めて家族が揃って暮らし始めた。彼は中央アジア環境センターで働き始めた。彼女は、幼稚園に通う子供の世話をしながら、インターネットを使った調査などを受けて自宅で仕事をしていた。子供がお腹にいるため、通常の勤務は無理だった。9月に二人目が誕生した。その子にはカザフ語でユリを意味するララという名前をつけたと伝えてきた。私は、ダブルサユリと呼んでいる。

### エピローグ

2013年の正月、わが家にカザフスタンから電話がかかってきた。彼女に筑波大から、大学に勤めないかという話があり、検討中だということだった。その後、しばらく何の音沙汰もなかったのが、沙汰止みかと思っていたら、4月に突然彼女から連絡があり、筑波大への就職が決定したことを伝えてきた。

ビザの申請とか様々な手続きを経て5月1日一家四人で来日した。職員宿舎に入居し、子供たちは大学キャンパス内の職員の子供用の保育所に預けることとなった。いよいよ彼女の筑波大助教としての仕事が始まった。

彼は、カザフスタンの勤務先から、在宅勤務が認められ、日本にいながら仕事を続けられることとなった。おそらく彼も、ドクターを目指すのではなかろうか。

初めての出会いから、あっという間の十二年間であった。